
モンスターハンター～偽者の剣～

オヒテノー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター〜偽者の剣〜

【Nコード】

N6440Z

【作者名】

オヒテノー

【あらすじ】

初投稿です。投稿主は才能なんざ皆無な中で書いております。お許しを。あらすじはひょんなことからハンターになってしまったある男の子ががんばっているいろんなモンスターを狩っていく話です。ここ、おかしいんじゃない？といった所はドンドン教えてください。また、感想なんかもらえちゃうととても嬉しいです。批判でも嬉しいです。

プロローグ？（前書き）

よろしく願います！

ブローグ？

P M 5 時 3 5 分

凍土にて

（・・・はぁ・・・疲れた・・・寒い・・・）

凍えきつた凍土で大きめの重いリュックを背負っているとある旅の商人はゲンナリしながらそう思った。

商人の名前は『ミライ』。

彼は今からユクモ村に行く予定だった。

（でも次に行くユクモ村ってところは確か温泉が名物だって聞いたことがあるから、あつまってから次の村に行こうかな）

と、呑気な事を考えながら歩いていると横からモンスター怪物の鳴き声が聞こえた。

彼は右の方を向いて少し考えると、

（この鳴き声はきつと『バギィ』だな。アイツらの吐き出す液はとも眠くなるんだよな。さっさと逃げよう）

そう思って前を向いたミライだったが目の前には例の『バギィ』がいた。

「チクシヨウ！！ もういやがるじゃねえかよー！」

ミライは驚きつつも、全力で『バギィ』から逃げ出した。

しかし彼の荷物はとても重く、はつきり言って絶望的なスピードで走っている。

そんなミライに『バギィ』が負けるわけがなくすぐに追いつかれ全体重をのせた体当たりが彼の背中にヒットした。

「うおっ！」

幸い体当たりはミライ本人ではなく彼のリュックに当たった。しかし当然彼はバランスを崩してこけてしまった。

「ぐぼっ・・・おっ俺はおいしくなんかないぞー!!」

半ば投げやりになりながら起き上がり、後ろに後ずさるミライ。とその後ろから足音がした。

「・・・おい！その足音のやつ！それ以上こっちに来るな！」

しかし足音はどんどん大きくなっていく。

「なにやってんだよ！聞こえねえのか！早く戻れって！ここにはモンスターがいるんだよ！」

そしてその足音の張本人が姿をあらわした。^{ハンター}

そのハンターは素早い動きで彼の背中に装備されている双剣を取り出し今すぐにでもミライを食べんとする『バギィ』の首を簡単に切り裂いた。

「・・・なんだあんたハンターだったのか・・・・・・たっ・・・助かった」

とてつもなくマヌケな声を発するミライにハンターは双剣をしまいながら、

「君！ケガはないね！」

そう聞かれてミライは、

「ありがとうございます。大丈夫です。」

と答えた。

ここでミライがハンターに対して敬語だったのは、べつにミライの頭がおいしい訳ではなく、単にハンターという職業がみんなの憧れであり、ヒーローのようなものだからだ。

この世界ではハンターがいるだけでほとんどの事が解決してしまう、そんな世界よのなかなのだ。

そして今回もそのハンターに解決してもらったというだけのはなしだ。

しかしまだミライは知らない、これからおこる惨劇に。

ブローグ？（後書き）

全体的にグダグダです。

多分これからつじつまが合わなくなることもあるでしょう。

そっとしておいてあげてください。

自己満足なんです。

プロローグ？（前書き）

2話目も連続で投稿します。

ブローグ？

pm 4時23分

凍土（ユクモ村付近）にて

偶然助けてもらったハンターと話していくとミライとハンターとの間には共通点があった。

それはこれからの行き先だ。

ミライはこれからユクモ村へ行くのだが、奇遇なことにハンターの方もこれからユクモ村へ行くそうだ。

そういったことから2人は一緒にユクモ村へ行くことになった。

歩きながら聞くハンターの話はとても素晴らしかった。

狩猟先で砥石を忘れて必死で狩猟エリアを駆けずり回つという話には爆笑だったし。仲間が死んでしまったという話をきいたときにはすごく悲しい気持ちになった。

そしてミライもハンターに旅をしている時の感動的な話をしていると不意にハンターが立ち止まり、とても悲しそうな顔で笑っていた。どうしたのだろう。

と、思っていたがそんな顔もすぐに消え、もとの笑顔に戻った。

なんかマズイ事言っちゃったかな？と思っていたミライだったが、そんなことはすぐに忘れまた話だした。

そしてしゃべり疲れた2人がとても寒かったのでホットドリンクを飲んでみると、ついにソレは現れた。

ソレはふざけたようなバカデカイ声を発しながら2人に近づいてきた。

『^{イビルジョー}恐暴竜』、それは出会ってしまったたら即撤退が鉄則のモンスター。
そんなモンスターが現れてしまったのだ。

「なっ・・・なんなんだ。このモンスターは・・・」

ついミライがつぶやいている中、ハンターは諦めたようなため息を吐いた後おもむろに彼の背中にある双剣を引きぬいて、

「早くその重い荷物を捨てて逃げろ！！その荷物とお前の命どっちが大切だ！！」

と急に大きな声を出した。

急に言われてビックリしたミライは、言われるがままリュックを降ろした。

・・・ここでミライは一つ気がついた。

きつとこのハンターはこの『^{バケモン}イビルジョー』に勝つことができない。
しかし自分を逃すためにあえて勝てない相手と戦おうとしているのではないかと。

しかし、ハンターは何でもないように。

「大丈夫！なんとかなるさ！」

と、言っているが『イビルジョー』はヨダレをダラダラ垂らしつつ今にも襲いかかりそうだ。

「絶対に追いつく！だから早く行け！」

そっぴいながら片っぱの剣を『イビルジョー』に投げた。その剣は見事にイビルジョーの片目に当たった。ハンターってスゲー。

『イビルジョー』の雄たけびが凍土にこだまする。

「絶対に追いついて来いよ!!」

そう言いながら全力で逃げ出すミライ。

ハンターの姿が見えなくなる。

ハンターのものであろう絶叫が響き渡る。

・・・どれだけ走ったのだろうか。

もう足の感覚がなくなっていた。

小高い山の頂上でミライは足を止めた。

意識がもうろうとしている。

「やつ・・・・・・・・やべー・・・・・・・・」

ホットドリンクを飲んでいるので凍え死ぬことは無いだろうが、モンスターに襲われそうで怖い。

村までもう少しだ・・・そう思ったとき不意に足がもつれた。

やばい。ここでこけてしまったらマジで死ぬ。

しかしミライはそのままこけて山を転がるように落ちてしまった。

ミライの視界が狭くなっていく。

そしてついにミライの意識が断絶した。

「良かった！目を覚ましたんですね！」

そんなこつるさい声が聞こえる・・・

すごい暖かい。そうかここは天国なんだなーとミライが超適当な事を思っていると、

「すみません！早速で悪いんですけど、クエストがたまっているんです！」

・・・は？どういう事？

「ちよつ、・・・え？」

ミライが混乱していると、

「さあ、ハンターさん、がんばっていきましょうー！」

ここは天国ではなくユクモ村である。

そしてミライはハンターになってしまっていた。

ブログ？（後書き）

どうでしたか？
感想待ってます。

第一話（前書き）

ドスジャギイ編です。多分すぐに終わると思います。

第一話

「……ハンターになってしまった……」

ミライはついつぶやいてしまった。

どうやらユクモ村あいつむの人はミライの事を凍土から来たハンターだと思っ
っている。

「……違う……きっと俺は旅商人だったはずだ」

でもどうしようか。考えてみよう。

正直に話してみる？

そんなこと言ってもだれも信じてくれないだろう。

逃げる？

でも逃げ出したらなんか後味が悪い。

しかもなんにも持っていないし。絶対飢えて死ぬ。

しょうがない、頑張ってみるか。

「とりあえずそれっぽく見えるように防具を着てみるか」

そう思いミライは近くにあった大きめの青いボックスのような物を
開けてみた。

中に入っていたのは……ユクモ村の工芸品だろうか、大きな笠や、
袴などが入っていた。ありがたい。

早速着てみると怖いぐらいぴったりだった。

そして武器の方も見てみたが、こちらも、工芸品のような少し古び
たものが数種類あった。

「まあ、あの人は双剣ハンターを使ってたから……双剣にするか」

または本者のハンターが万が一ユクモ村に来た時に辻褃が合うように・・・ね。

そしてミライが双剣を背中に装備し、先程の女の子のところにいくと、彼女は甲高い声で、

「やっと起き上がりましたね！！ さあ、早速クエストを受注してください！！」

「つつてもなんかお勧めのクエストとかないの？」

「そうですね。最近はこの村の近くにある溪流で、『ドスジャギイ』が現れて周りの家畜などを襲っていて被害がすごいですね」

「じゃあそいつを早いとこそいつを倒さないとヤバイんじゃないのか？」

「はい」

「そうか、じゃあそのクエストをやるよ」

「わかりました。でもハンターさん回復薬とか何も持ってないですけど大丈夫ですか？」

「ん〜でもお金を全く持ってないからな・・・」

「じゃあ私がお金を貸しますよ！！貸したお金はこのクエストの達成金でかえしてくればそれでいいです！！」

「そう？じゃあありがたく」

そしてある程度のお金を貸してもらったミライは道具屋に行ってみると、

「うん？君、見ない顔だね。どうしたの？」

男の人にいきなり大きな声で話しかけられた。こっちは何も喋っていないのに。

「どうしたんだい？何か買いたいのだろうか？」

「あつ、はい」

そしてミライは回復薬や砥石などを購入した。

こうしてみると本当にハンターみたいだ。

そりゃあ男の子なら一度は夢見る職業だもんな。

・・・よし大丈夫そうだ。行こう。

とここで疑問が生じた。

「どうやって渓流に行くんだ？」

考えてみればそうだった。どうだろう。歩くのだろうか？・・・はあしかし女の子はそれを否定して、

「なに言ってるんですか？ガーグアに乗って行くんですよ」

そうかこの辺りの主な交通手段はガーグアだったわけ。

「ありがとう。行ってくるよ」

「はい！行つてらっしゃい」

そんな明るいクエスト嬢の声を聞きながら、ミライはガーグアの後ろの荷台に乗った。

ガーグアが動き始める。

あまり心地よいとはいえない乗り心地だが、我慢するしかない。

でも実は結構嬉しい。昔の夢がなかったから。

確かにモンスターは怖いけど。まあいつも重い荷物持ってたから体力も人並み以上にはあるはずだし。

「うーん、まあなんとかなるかな」

相変わらず呑気なミライだった。

第一話（後書き）

ドスジャギイ編とか言っておきながらドスジャギイが話の中にほとんどないですね。きっと次ぐらいには出てきてくれることでしょう。

第二話（前書き）

前回は、さあ『ドスジャギイ』に挑戦だ！という感じでしたが・・・

第二話

クエストが始まった。

ミライは事前に村で買っていた地図を広げた。

「うーん、ここがユクモ村だからこの場所はだいたいここら辺かな」
まずは自分の居場所を突き止めなければ始まらない。
今の場所がわからないまま突っ込んで、迷子になってモンスターの討伐どころではなくなってしまう。

そして周りを少し歩くとすぐに自分の場所がわかった。
もともと地図を読むのは得意なのだ。

「これくらい出来なきゃ行商人なんてやっていけないしな」

ミライは暫定的にいくつかの場所に数字を振った。
こうしておく事でいくらか地図が分かりやすくなるからだ。

「よし、まあとりあえず手当り次第まわってみるか」

今回の討伐対象は『ドスジャギイ』という『ジャギイ』や『ジャギイノス』などの親玉のような奴らしい。
また、『ドスジャギイ』はその他のモンスターよりも一回り大きいぞうだ。

そして一番の見分け方は顔のところにしている大きなエリマキのようなひだひだだ。

これは直接写真を見せてもらったからわかる。

数分歩き回っていると、『ジャギイノス』を三匹見つけた。

とりあえず肩慣らしにこいつらをやっつけようと思い、ミライが双剣を背中から抜くと、『ジャギイノス』がミライの気配に気づき、ミライの方を向き叫び声をあげた。

覚悟を決め『ジャギイノス』に斬りかかるミライ。

「うおおおおおおお！！！」

ミライの攻撃は当たった。しかしあまり『ジャギイノス』にダメー
ジは与えられていないようだった。

しかし幸いにもこの双剣という武器の種類は全体的に軽い武器だった
のでミライはそのまま次の攻撃に移ることができた。

三回、四回と攻撃を当てていくとブチっという小気味の良い音が聞
こえて『ジャギイノス』のうちの一匹が倒れたまま動かなくなった。
そしてそれを確認したミライは残りの二匹にむかっていった。

ようやくすべての『ジャギイノス』をミライは倒した。

「はあはあ……はあはあ」

一匹目は意表を突いて倒したが、二匹目からは『ジャギイノス』達
も慎重に襲ってきた。

そしてやっとのことで三匹目の『ジャギイノス』の息の根を止める
ことができたのだ。

「……疲れた……」

しかしまだ『討伐対象^{ドスジャギイ}』を倒すどころか出会ってすらいないので、ミライは双剣をしまつてまた歩き始めた。

数十分エリア内を歩きまわった。

その結果『ジャギイ』たちの巢のようなところを見つけた。そしてやつとのことで『ドスジャギイ』を見つけた・・・

「ったくも。どんだけ遠くにいるんだよぉ」

しかしだいぶ探しまわったので疲れたが、結構沢山のモンスターも倒したし、自信もついた。

「さぁーとつととやつつけるか!!」

『ドスジャギイ』がこちらに気づいた。叫び声をあげる。やはり親玉は雰囲気が違う。睨まれるだけで気圧されそうだ。

しかしそんなものに負けてはいられない。

ミライは双剣を背中から引き抜いて『ドスジャギイ』にむかって駆け出した。

こいつさえ倒せば村に帰れる。

そう、こいつさえ。

第二話（後書き）

すみません。今回も『ドスジャギイ』が全然出てきていません。
でも次こそは絶対出します。
頑張ります。

第三話（前書き）

皆さんあけましておめでとうございます！
今年も頑張って行きます。
よろしく願います。

第三話

大きな声で叫んで突撃していったミライだが内心めちゃくちゃ緊張していた。

（やべえ！！超怖え！！！
しかもこんな奴本当に倒せるのか？）

そんなことを考えていたミライに『ドスジャギイ』が接近してきた。そしていきなり噛みついてきた。

・・・もろにヒット。

「うつ、うがつ！！・・・げほっ」

今までのモンスターたちの攻撃はだいたい防具のおかげであまりダメージを受けることは無かったのだが、ここはやはり『ドスジャギイ』攻撃が重い。

とりあえず距離をあげ、回復薬を使うミライ。これでいくらかはマシになる。

『ドスジャギイ』はミライに再び噛みつこうと距離を詰めてくる。

しかしミライも同じ攻撃を何度も当たってあげるほどお人よしではない。

『ドスジャギイ』が噛みつく為に顔をあげた瞬間ミライは『ドスジャギイ』の正面から側面にまわりこみ、両手の剣で斬りつけた。

うめき声をあげる『ドスジャギイ』。ミライはそのまま連続で斬りつけた。

しかしそこまでだった。急に『ドスジャギイ』が後ろにさがり、叫び始めたのだった。

「なんだ？急に叫びだして」

するとそこらじゅうの穴からたくさんの『ジャギイ』や、『ジャギイノス』が現れた――それぞれ八匹くらい。

「ふっ・・・ふざけんなー！！　こんなにたくさん相手にできるかー！！」

そして『ドスジャギイ』が攻撃命令をだした。

すべてのモンスターたちがいつきにミライを睨みつけた。

32もの鋭い眼光がミライに襲いかかる

そして次の瞬間ミライにむかってたくさんのモンスターが噛みついてきた。

必死に応戦するミライ。しかし数の利は相手にある。あっという間に端っこの方に追い詰められてしまった。

「くっそー！！せこいぞ！！・・・っと、危ねえ！」

『ジャギイノス』の噛みつきを回避して逆に斬りつけるミライ。

そうしてたくさんの相手を相手どる。

しかし結局すべてのモンスターを倒した時には、もう『ドスジャギイ』はそこにはいなかった。

だが、『ドスジャギイ』は隣のエリアに移動してただけだった。

しかももう『ドスジャギイ』には子分たちはいないようで、これ以上仲間を呼ぶことはなかった。

「よっしゃ！もう何もこないみたいだなー！！」

この機会をチャンスとみたミライは、全力で『ドスジャギイ』を連続で斬りつけた。斬りつけまくった。

そしてついに『ドスジャギィ』の体が宙をまい、やがて地面に叩きつけられた。

「やった！」

両手をあげて喜んでいるミライだったがしかしそれが災いした。急に起き上がった『ドスジャギィ』に反応できなかったのだ。そしてその鋭い牙によってミライの脇腹がえぐられた。

第三話（後書き）

さすがに0時に投稿は出来ませんでしたorz
・・・残念。

しかも全然書けてません。

第四話（前書き）

皆さんこんにちは！

やつとのことので『ドスジヤギイ』編終了です！

しかし今回はやつつけ感が凄いです。

一応言い訳はあります。詳しくは後書きにて。

第四話

脇腹をえぐられてしまった。

しかしそれよりも、人間の体がこんなにも簡単に引き裂かれてしまったという驚きがまず出てきた。

そして次に遅れて壮絶な痛みがミライを襲った。

「うぐあああああああああ！！！！！！！！！！」

脇腹が焼けるように痛い。意識が遠のいていく。『ドスジャギイ』
が遠くで喜びの叫び声をあげている気がする。

「くっそ．．．．．こんな．．．所で．．．死ぬのか．．．よ．．．．
嫌だ．．．．．な．．．．」

血を口から吐き出しながら、ミライはつぶやく。

「いや．．．．．こんなの．．．．．嫌だ．．．．！！」

確認するようにミライはつぶやく。

「ゴフツ．．．．．やってやる！！．．．．．あいつを．．．．．倒す．．．．．
！！」

その瞬間ミライの中の何かが変化した。

目の色が変わり、無表情になった。

それだけではない。手に持っていた双剣も赤みを帯びている。

「・・・・・・・・・・フッ」

短く息を吐き一瞬で『ドスジャギイ』との間合いを詰めるミライ。そしてそのまま『ドスジャギイ』の胴体を切りつけた。

ついよるめいてしまう『ドスジャギイ』。しかし『ドスジャギイ』は、必死で踏ん張りそこからミライに噛みついた。

通常のミライなら絶対に避けられない一撃。しかしその攻撃をミライは紙一重で避けた。

『ドスジャギイ』の顔面がミライの目の前にあらわれる。

『ドスジャギイ』に驚いた表情が浮かぶと同時に、ミライの乱舞が『ドスジャギイ』に炸裂する。

顔に、胴体に、脚に、ミライの攻撃が当たる。

「ハアアアアア！！！」

そして最後の一撃を当てた時ついに『ドスジャギイ』が吹っ飛び、動かなくなった。

クエスト達成。

それと同時に、双剣から赤い光が消え、ミライの目も元の暖かい色に戻った。

しかしそのままドサツと倒れこんでしまった。もともと脇腹をえぐられてしまっている体で無理矢理うごいたツケがまわってきたのだ。遠のいてゆく意識のなかでミライは考える。

（『ドスジャギイ』は・・・・・・・・倒したよな？・・まさかまた起きあがったりしないだろうな・・・・・・・・しかし今のは何だったんだ？俺が俺じゃないみたいな感じ・・・・・・・・くそっ・・・・・・・・わかんね・・・・・・・・）

そしてそのままブツリとミライの意識が途切れてしまった。

「・・・そしてまたここに戻ってくるのか〜」

ユクモ村のベットで再びミライは目覚めた。

いつの間にか装備品が無くなっている。まさか誰かに盗られたということはないだろう、親切な人が外してくれたのかな？後でお礼を言わなきゃ。

「そうだ脇腹の傷は〜と・・・うわっ！！いつてえ！！」

しかし噛みつかれた時よりはマシになっていた。でも白いはずの包帯が赤色になっていた。

「つつ・・・あつ！そうだ！あの後どうなったのか知りたいな」

無理矢理体を動かして外に出るミライ。そして周りを見わたすとすぐにクエスト嬢はいた。

クエスト嬢はミライに気がつくと思ったような声をあげながら、慌てて駆け込んできた。

「ちょっと！！なにやってるんですか！！今あなたは絶対安静の状態なんですよ！！！！」

「いつ、いやゝあのクエストが結局どうなったかちょっと知りたかったし。」

「あゝあれの事ですね。うゝんそうですね。結果から言いますと、」

「ズバリ、成功です！」

「おお！！！！」

「報酬金もたんまり出ています！！しかも素材も！！やつぱりユクモ村の特産品を防具にするなんて無理があつたんですよ。良かったですね。これで新しい装備なんかも作ってもらえるかもしれないですよ！！」

えっ……ちよつと待て。あの防具に無理があつたのかよ。俺そのせいで脇腹えぐられたのかよ………すげえへこむ。というか悲しい。

「何はともあれ……ハイ！！こちらがモロモロ全てですよ！」

結構大きな箱を渡された。うおっ、結構重い！脇腹痛いのに！！響いちやうじゃん！！！！

・・・とりあえず箱を開けてみた。本当にお金が入ってる！ん？でも何か中途半端な金額だ。

「そりゃあそうですよ。だって私が先にこの箱を開けて貸していた分を回収しといたんですから。」

「なにやってんだよ!!俺こっちは1番最初に見たいタイプの

人間なんだよ!!」

「そうでしたか？それはすみませんでした。でもこれでもう貸し借りはなしですから、安心してください」

「まあ・・・あつ、ありがとね、お金貸してくれて」

「いえいえ、どういたしまして」

「じゃあ他のやつも見してみよつと」

中にはいろいろな物が入っていた。『ドスジャギイ』に関連してそんな物から、石ころのような全く関係のない物まで結構入っていて驚いた。

「すげ〜な。本当にいろいろな物が入ってるんだな〜」

「えっ？なに言ってるんですか？まさか始めて見るわけでもないはずなのに」

あつ、そうだった。危ない、素に戻ってた。はしゃぎすぎだよな・・・俺。

「あ〜うん、ごめん。まあ、ありがと。今日は脇腹がまだ痛いから寝るよ。じゃあね」

「はい！さようなら！〜」

さあ、寝るか。

第四話（後書き）

・・・言い訳をします。

今年は2012年という事で2012年らしいことをしたいなーと
考えていましたところ、急に「そうだ！文字数を2012文字にし
よう！！」なんてバカなことを思いついてしまい、実行してしまい
ました。

後悔はしていません。

第一話（前書き）

こんにちは！

もうすっかりお正月ムードを消えてしまいましたね。

何だか寂しいです。

それではクルペッコ編スタートです！

第一話

あれから数週間、体も全快した。

「よし！！そろそろ次のクエストにいくかつ！！」

「なに言ってるんですか！ダメですよ！」

いきなりダメだ、と言われた。

「えっ？なんで？」

「いやゝ、だつてハンターさん防具がボロボロなんですよ？この状態でクエストに行っても絶対に死にますって」

「そつ、そうか」

「そ　こ　で　！！　いまから道具屋さんのお隣にある加工屋さんに行つてきて何か装備を作つてもらってください」

「・・・うん、オッケー。行ってくる」

「でも気をつけてくださいよ、あの加工屋おじいちゃんさん結構難しい人ですから・・・」

「えっ？なんだって？」

最後の方があまり聞き取れなかった・・・しかも早口で喋ってたし。

「まあ、頑張ってください。応援してますからね！」

なんで応援されてんの？俺。頑張らなきゃいけないの？・・・だ
んだん怖くなってきた。

そう思いつつもミライは件の加工屋さんくだんに行った。

お店の外から内側は見えないが、逆にそれが怖さを醸かもし出していた。
恐る恐る中に入ってみると、中はとてつもなく熱かった。

「なんだここ！！すごい熱い！！」

「なんだとはなんだ！！このボンクラめが！！」

声の方を見ると、おじいちゃんが顔を真っ赤にして怒っていた。
迫力がある。すごい怖い。

「あ、あなたが加工屋のおじいちゃんですね」

「そうだ！それでどうかしたのか？」

「あの・・・俺に防具を作ってくれませんか？」

「・・・防具ってことはお前、ハンターってことだな」

「はい。でももつといい装備が欲しくな・・・」

「ちょっと待ちな。お前、目を見せてみる」

急に言われた。結構怖かったので素直に従うことにした。

「ふむ・ふむ・ほう、そうか!! よかるう!! 何でも作ってやる!!!」

認められた!? 目を見ただけで何がわかった??

「えっ? は、はい。ありがとうございます」

「で? 防具だったな!」

おじいちゃんの顔がにこやかになる。

「ええ。そうです・・・?」

にこやかになってもなんか怖い。裏がありそうで。

「お前、なんかモンスターの素材を持っているか?」

「『ドスジャギイ』の素材なら持ってますけど」

「よし! ならそれを持って来い!!」

「はい。わかりました」

数分後、ミライが持ってきた素材を見て加工屋のおじいちゃんは驚いた。

「スゲエじゃねえか。これなら結構いい防具が作れるぜ!!」

「そうなんですか?」

「そうともさ！ちょっとだけ時間をくれ！！すぐにいい物を作つてやるぜ！」

そういつておじいちゃんはお奥のかまどの方に行つてしまった。

「よし。これで防具は大丈夫だな。でもまだ時間がかかるつて言つてたからな。うん、何かクエストがないか聞いてくるか」

ミライは加工屋を出て、クエスト嬢のところに行つた。するとクエスト嬢はミライをなくさめるように喋つた。

「しょうがないですよ。あのおじいちゃんはああいう性格なんですよ。だから決してハンターさんが悪いんじゃないんですよ？」

「えっ？なに言つてんの？」

「はい？だつてハンターさん断られたんじゃないんですか？」

「いや、なんか目を見せたら認めてもらえた」

「それつてすごい事じゃないですか！！」

「へへそうなのか」

「そうなんですよ！！」

「そうだ。そういえば何か新しいクエストつてない？」

「あつ、はい！！いま出ているクエストは『クルペッコ』などです

かね。知ってます？「クルペッコ」

「いや。知らないな」

「『クルペッコ』は自分以外のモンスターの鳴き真似をしてそのモンスターを呼び寄せちゃうモンスターなんです」

「よし！じゃあそのクエストやってみようかな」

「はい。・・・ちよつと待ってください。このクエスト他にも参加者がいるみたいですよ！」

「うん、うん。」

「今回のクエストは、複数人で戦うみたいです」

「ふんそうなんだ。つてえっ？」

まっ・マジかよ。まあ心強いけど。嬉しいけど。

「はい！！！！それでは頑張ってくださいね！！！」

と、そのとき遠くから大声が聞こえた。

「オイ！！！！！！そのハンター！！！！！！頼まれてたのが出来たぞ！！！！！！！！！！」

「……だそうですよ！早く行ってあげてください」

「うん。わかった」

早足で加工屋に向かったミライだったが、

「遅い!!」

怒られた。

「まあいい。ほれ、出来たぞ」

渡された防具はすごくかつこよかった。

早速装備してみると何だか力が湧いてきた装備が違っただけでこんなにも違うのだろうか。

「本当に凄いや！ありがとう!!」

「おう!! また来いよ!!」

「はい！」

そして移動用のガーグアにミライが乗り込むとゆっくりと走り出した。

共同戦線を張る仲間はどうな奴なんだろう。

まだ見ぬ仲間の姿を思い浮かべながらミライを乗せてガーグアは走り続ける。

次の狩り場は砂原。灼熱の地。

第一話（後書き）

やっぱりドスジャギイの時のように始めはあまりモンスター達の事が出てきませんね。

しかし次は新キャラも出てきます！！
お楽しみに！

第二話（前書き）

そろそろ投稿スピードが遅くなり始めていますね。
頑張ります。

第二話

狩り場に着くまでとても大変だった。

途中でなぜかガーグアが暑さにやられてぶっ倒れてしまったし、ガイドの人もビビって逃げてしまったのだ。ここで地図を持っていなかったら確実にアウトだった。

ともあれなんとか無事にBC^{ベースキャンプ}にたどり着けたミライだったが、

「あれ？誰もいないじゃん？」

BCはもぬけの殻だった。とりあえずここに人がきているか確認するために支給品ボックスを見ると、ところどころ無くなっている物があった。ということは・・・

「少なくとも誰かここに来てはいるっていう事が・・・うわ・・・置いてきぼり食らってんじゃん」

ハァ、と深いため息を吐くミライへ不意に声かけられた。

「こっこんにちはっ！！あっあっあの！あなたも『クルペッコ』とっ討伐の人ですよね？？？」

超拳動不審な女の子が声をかけてきた。というかメチャクチャ緊張している感じだ。

自分も加工屋のおじいちゃんに話している時こんな感じだったのだろうか。

でも同じ討伐隊の人らしいし、何だか安心した。しかし彼女は相当あがっているらしく、

「ちつ違っんでしたんでしょうか！すっすっすみませんですよ！！」

支離滅裂だった。まあニュアンスは伝わってくるので大丈夫な訳だが、もうこれ以上放置しておくとうどんな方向に行ってしまうのかわからないので、答えてあげることにした。

「いや、それで合ってるよ。確かに俺は『クルペッコ』を倒しにきた」

「そっそんなんですか？良かった」

ん？急に安心したぞこの子。

まあいいや。仲間がいるのならもう一緒に行っちゃおう。『クルペッコ』を探しているうちに、他の仲間に出会えるかもしれないしね。

「うん。それじゃ早速行こうか。」

「はい！！行きましょう！！・・・っと・・・ちょっと待ってください。いまお薬を飲みますね！！」

「ん？お薬？」

「はい。知りませんか？千里眼の薬ですよ」

ああ、あれか。何回か俺も行商人時代に取り扱った事がある。確かあれは大型モンスター達の気配を察知できる代物だったはず。

「さあ、飲みますよ」

そして一気に彼女は千里眼の薬を飲み干した。

瞬間、変化が訪れた。女の子の目が一気に見開いた。髪の毛と同じ綺麗な茶色の目の色がさらに濃くなった。

「・・・見つけた。ここから南南西に261m。そこに『クルペッコ』がいます。行きましょう」

「おっ、おう!!・・・ちょっとまってよ!置いてくなって!」

びつくりした。急に性格が変わってしまったようだった。・・・それにしてもこれが千里眼の薬か、なんか怖いな。というかハンターになってから怖い事があり過ぎだろう。正直ハンターという職業を見くびってた。

南南西の方に進んでいくと本当に『クルペッコ』がいた。

しかしそこにいたのは『クルペッコ』だけでは無かった。

まず最初に見えたのは、『クルペッコ』とその周りに飛びかっている鮮血。

それだけだったら良かったのだ。もしかしたら『クルペッコ』本体が出した血かもしれないから。

しかし現実はそのなに生易しいものではなかった。

次に見えたのが『クルペッコ』のクチバシに引っかかってた誰かの腕のようなもの。

そして、最後に見えたのが『クルペッコ』の足元にあったグチャグチャになった肉片や鎧の破片。

そう、それは人の死体。まだ腐敗してすらいらない人肉の塊。

「なっ・・・おい・・・これって・・・」

「ええ。先行していたハンターでしょうね」

「こんなことになるのかよ・・・」

「本当に酷いつ・・・」

「どっ・・・どうする？」

「気づかれる前に一旦BCに戻って本部に報告しときましょう」

そして2人はBCに戻り、専用の通信機で先行したハンターの死を報告した。

しかし本部が返してきた指令は簡単なものだった。

「冥福を祈る。なお、生きのびた両名はこのまま『クルペッコ』討伐に向かえ」

地獄はまだ続く。

第二話（後書き）

いろんな人からご指摘を受けましたので少し展開を遅くしてみました。

どうでしょう？

何かあまり変わらない気がしますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6440z/>

モンスターハンター～偽者の剣～

2012年1月14日17時54分発行